た行懸りで、刹那の間にさうした惨劇が行はれたのであるといふことであつた。運わるくそこに巡査が來てゐた。また、運わるくそこに、村上の女に絶望して、いくらかやけに近い心持で長兵衛が歸つて來た。『しかしな、ひよつとさういふことが出來したけども、矢張、平生が肝心だよな。さういふ恐ろしい種は平生に蒔かれてゐることでな？　矢張、村上の女に惚れてゐただな？　そつちで失望して了ふと、もう生きてゐたつてしやうがないやうな氣がしただな、きつと……。それで、あんなことが始まつたゞよ』

かう分家の上さんは言つた。

『村上の女は何うしました？』

當然問うべきことを今まで問はなかつたといふやうにして加藤は訊いた。

『一度、お墓參りに内所でやつて來たつけ、おらは行き逢つたけども、そんなにわりい女でもねえだよ』

『まだ村上にゐるのかね？』

『何でも平林の百姓の上さんになつたつていふこんだよ……。もう、今ぢや四十五か六だで、藝者もしてゐられめいからな』

『佳い女でしたか？』

『さうだな、此處等にはちよつとあのぐれゐな女はねえだな。お墓の歸りに、こゝに寄つたが、泣いてな、眼を眞赤にしてゐたよ。私が、あの二人の子供さへ引受けてやれば、あんなことは出來なかつたのに……ツて言つてな。何でも長兵衛さん、その前の日にそのことでその女のところに相談に行つただな。すると女はそれをはねつけただ？　そんなことは出來ねツて言つただよ。それをな、女は非常に申譯がないツと言つてゐたよ。まアかう言つて來る女だで、わるい女ぢやねえ。あゝいふ稼業をしてゐれば、何うしたつて、さういふ風になるでな？』

『人間はそこを注意しなければならんな！　一番そこが怖い。そしてそれは皆なヤケから起つて來る！』加藤は若主人の方を向きながら言つた。

一時間ほどゐて、加藤達はそこを出て來た。加藤はもう一日北中に泊ることに決心して、その一家の墓のある方へと今度は案内して貰つた。

それは山裾のさびしい寺であつた。村がさびれたと同時に、寺も夥しく大破して、本堂には雨が洩り、落葉が堂の中まで吹き入れられるといふ光景であつた。庫裡からは、汚い法衣を着けた子僧が出て來た。

それでも墓石はちやんと立つてゐた。誰か來て手向けて行くと見えて、花はいつも絶えたことはないといふ話しであつた。矢張、『皆な可哀相に思つてゐると見えて、子供の墓には、特に花が多く上げられてありました。その當時は、隨分、お參りするものがありました……。何でも子供の墓にお詣りすると、災難を遁れるとか何とか言つてな――矢張田舍ですからな……。同情の塊がさういふ風になつて行くんですな……』若い主人はこんな風に話した。

加藤は不思議な氣がした。その慘劇がはつきりとその目の前にあらはれて來るやうな氣がしたかれは色濃く染められてある戀愛と、その止み難い心の犧牲になつた人達の運命とを、それからそれへと繰返さずにはゐられなかつた。かれは水を灌いでその墓の前に手を合はせた。

三三

加藤が歸つて行つてから、また年月が經つた。廐屋の娘は小國の金持に嫁ぎ、若主人夫婦には始めは男、次ぎは女、その次は女といふやうにつゞけて子供が出來て育つて行つた。分家の上さんは、加藤が來た翌々年の夏、心臓がわるいなどゝ言つてゐたが、その冬にはもう此世の人ではなかつた。

雪は依然として凄じく降つた。此頃では十日も二十日も交通の絶えて了ふことはめづらしくなかつた。汽車のレイルの通つてゐるところは、日に日にひらけて行つて、新しい文化も入つて來てゐるけれども、それから五六里も山の中に入つた地方は、全く顧みられずに、荒廢したまゝにまかせられてあつた。冬は三月の間、全く埋もれ果たやうにして暮した。

追分のところはいつか全く畠になつて了つてゐた。もはやそこには、昔の旅舍のあとも、あの慘劇のあつた二階屋もなかつた。すべて全くもとに歸した。再び自然に戻つて了つた。

その追分から少し行つたところに、地味がわるいので、松を栽えたり甘藷をつくつたりして、いろいろと經營した廣々とした土地があつたが――時には桃畠や梨子畑にしやうとしたことなどもあつたが、驛が荒廢するにつれて、次第に、さうした不毛地は人が構はなくなつて、後には全く篠やら萱やら低い草やらの生えるところとなつて了つた。春先には村の子供達がよくそこに紙鳶を揚げに來た。

『おい！』

『何だ？　何うしたんだ？』

『早く此方に來ろよ！』

などといふ子供の聲がその廣場に響きわたつた。

紙鳶にはいろ〳〵なものがあつた。達摩の繪を描いたのもあれば、おかめをそのまゝに切りぬいたものもあつた。かと思ふと奴凧の形をしたのも揚がつた。風の強い日には、尾を長くつけ、うなりを大空に響かせて、いかにも得意さうに紙鳶を眺めてゐる子供達などもあつた。

時には此方の凧を其方の凧がすくつたりした。と、すくはれた凧は倒になつて眞直に落ちた。子供達はワイワイ言ひながらその方へと一生懸命に走つて行つた。かと思ふと、一方には、遠く離れて、靜かにあがつてゐる紙鳶などもあつた。

夕暮近くなつても、子供達は容易にその廣場から歸つて來なかつた。爲方なしに、子供達の母親だの、兄だのが迎へに行つた。

『定や！』

『正や……もう、御飯だからお歸り！　いつまでゐると、狼や狐に喰はれるだ……』

『おらが家の雄次を呼んでくれや！　そら、そこにゐるで』

こんな聲があたりに滿ちた。で、子供達は紙鳶の尾を長く曳き擠つたり、糸卷の絲をほつたらかしたりして、てんでに自分の家の方へと歸つて行つた。あとはしんとなつた。全く寂寞があた

りを領した。やがて夜の帳が空を蔽ふと、今度は天上の星——いつまで經つてもその歡樂とその光彩とを失はない星と月とが、燦爛としてその饗宴をそこに展げて來るのであつた。と、下界では、山の裾を繞つた溪流が、さながらそれを羨むやうに——その變らないいつもの饗宴を羨むやうに、微に音を立てて流れて行つた。

大正十一年十二月十日印刷
大正十一年十二月十五日發行

廢 定價金貳圓五拾錢

著作者　田山花袋

發行者　東京市神田區表神保町十番地　福岡益雄

印刷者　東京市牛込區早稻田鶴巻町四百三番地　谷口熊之助

印刷所　東京市牛込區早稻田鶴巻町四百三番地　金星堂印刷部

發行所　東京市神田區表神保町十　金星堂
電話神田　三八五三番　四八三一番
振替口座東京三三二八番

金星堂名作叢書目錄

森田恒友氏裝表紙木版
手刷ポケット形極美本
價各册五十錢送料四錢

◇長篇小說

1・曠野の戀　田山花袋氏著
爛熟せる年增女の愛慾の悶えを大膽なる筆致にて描く

3・人さまざま　正宗白鳥氏著
日常茶飯の生活を描いて人生の無常と虚無を暗示せり

5・友と友の間　菊池寛氏著
漱石氏の死を因として生じたる戀愛三角關係の側面觀

12・神童　谷崎潤一郎氏著
春の惱みを知りそめて次第に墮落し行く「神童」の物語

13・床甚　藤森成吉氏著
深く人間性に滲透して其暗面を剔抉し深刻悲痛を極む

24・死兒を抱いて　廣津和郎氏著
死兒を抱いて流涙せる女が血と涙を以て書きたる遺書

25・月光曲　田中純氏著
一未亡人の情事を描きて艶麗、性慾描寫の極致を示す

◇短篇選集

2・離るる心　德田秋聲氏著
「離るる心」「勝敗」他一篇何れも男女葛藤の奥秘を發く

7・懶い春　久米正雄氏著
作者近時の代表作「懶い春」及初期の傑作「工廠裏にて」

8・奇怪な再會　芥川龍之介氏著
短篇五篇、何れも高雅なる香氣に充てる眞の藝術品也

9・銀二郎の片腕　里見弴氏著
「銀二郎の片腕」「父親」他二篇、秦四の名篇に比すべし

14・雲雀　藤森成吉氏著
抒情味に溢れたる世にも美しき戀物語「雲雀」、他二篇

15・花と實と棘　佐藤春夫氏著
金作中より精粹を拔いて、「初秋」「春淺き日に」等十篇

17・恭三の父　加能作次郎氏著
「夕立雲」「恭三の父」他一篇人生味に富める近來の傑作

18・祖母　加能作次郎氏著
「庭前」「霰降る日」他二篇人間的なる深き情味溢れたり

19・屋根裏の戀人　宇野浩二氏著
都市放浪者の寂しき心情と不幸なる戀を描ける名篇也

21・ある女の犯罪　江口渙氏著
正義に燃ゆる筆致を以て社會組織の缺陷を剔抉し切實

22・惡魔　葛西善藏氏著
「惡魔」「兄と弟」「池の女」「呪はれた手」其他珠玉の名篇

23・幼年時代　室生犀星氏著
春の若芽の如く甘く哀しき筆にて幼年時の回想を描く

26・或る求婚者の話　久米正雄氏著
可憐清麗珠玉の如き短篇四つ、著者が若きの紀念也

28・中傷者　菊池寛氏著
「中傷者」「入れ札」等三篇、人間性の機微を穿てる名作

29・父母　菊池寛氏著
「父、母、妻、子」他三四種、好評噴々たりし近作を蒐む

30・彼女の戀人　加藤武雄氏著
性格と戀愛の悲劇を作者獨特の清純なる筆致にて描く

31・戀愛の後　水守龜之助氏著
夢と苦惱と歡樂の交錯せる青春の日を描けり、他一篇

32・月明　豐島與志雄氏著
繊細なる心理と官能の描寫は他に比類なし三篇を收む

33・野の哄笑　相馬泰三氏著
詩とユーモアに充てる瀟洒なる作風「野の哄笑」他八篇

◇長篇戲曲

11・恐怖時代　谷崎潤一郎氏著
惡魔的耽美主義の時代劇官能の享樂を極度まで强調す

◇戲曲選集

4・父歸る　菊池寛氏著
菊池氏幾十の劇作中隨一との稱ある「父歸る」他六篇

6・牧場の兄弟　久米正雄氏著
牧歌的情調に富める神品也「地藏敎由來」の一篇を添ふ

16・二週間　長與善郎氏著
人道主義を高唱せる力作二篇「二週間」及「孔子の歸國」

20・水のおもて　久保田万太郎氏著
人の世の果敢なさを呪ふて詩と哀愁に充てる名作四つ

34・句樂の死　吉井勇氏著
代表的傑作「句樂の死」「走馬燈」「神來る」の三篇を收む

金星堂刊

創作書類拔萃目錄

出版月報——往復葉書にて御申込次第御送附申上げます

I 長篇小說

◆**淺い春**　四六判紙裝美本三七八頁　定價二圓二十錢送料六錢　田山花袋氏著

淺い春——そこには人生が描かれてゐる。人生の中に浮き沈みする男女の姿が描かれてある。果敢ない、併し美しい歡樂のさまが描かれてある。苦い、併し甘い愛慾の諸相が描かれてある。

◆**春雨**　四六判紙裝美本二三〇頁　定價一圓三十錢送料六錢　田山花袋氏著

柳暗の巷の一女性を描いてその社會に伏在する歡樂苦痛幸福悲哀の全相をまざまざと活躍させてゐる。殊に末段女主人公が祕密な歡樂を知つて獨り祕かにそれに耽るあたり艶麗無比の文字だ。

◆**殘る花**　四六判紙裝美本二〇四頁　定價一圓三十錢送料六錢　田山花袋氏著

ある料理屋の女中を女主人公として、中年の女の爛れたやうな愛慾の生活を描いたものである。女性を見る目の深さは他作家の到底及び得ないものがある。作者自ら快心の作となすものの一つ。

◆**深淵**　四六判紙裝美本二九八頁　定價一圓七十錢送料六錢　正宗白鳥氏著

性に眼覺めた青年の戀を逐つて奔る熱い熱い心。それを傍觀してゐる老夫婦の乾きはてた寂しい心情。——その對照が白鳥氏一流のニヒリスティックな觀方で描かれてある。

◆**迷へる魂**　四六判上裝鍋井克之氏裝　價二圓八十錢送料十二錢　宇野浩二氏著

自叙傳的の長篇小說。文學青年時代の著者自身の、夢と苦惱とに充ちた生活を描いたものである。しみじみとした、ペーソスに富んだ獨自の作風である。

◆**お光と千鶴子**　四六判紙裝美本二二八頁　定價一圓五十錢送料六錢　廣津和郎氏著

性格破產者——何といふ悲愴な響を傳へる言葉であらう?——實に近代人の傷いた心は戀にさへも容易には醫され難い。作者が血を以て描き出した破れたる愛の祕史である。

◆**群生**　四六判紙裝美本五百頁　定價二圓二十錢送料六錢　本地正輝氏著

第四階級より身を起した新人の、光まばゆきばかりの處女作である。全篇熱烈なる叫びと眞摯なる批判に充ちてゐる。一個の問題小說といふ意味からも凡ゆる人々の一讀を要する書だ。

◆**愛慾の垢**　三六判紙裝美本二〇四頁　定價金一圓送料六錢　相馬泰三氏著

眞摯な心持を抱いた一青年作家と、魅惑的な處女との戀の文學である。全卷、熱烈な愛の誓言を以て終始してゐる。讀者を引き込まずには置かない艶美を極めた作だ。

◆**灰燼**　四六判紙裝廣川松五郎氏裝　定價二圓五十錢送料十二錢　**徳田秋聲氏著**

豐艶な肉體を持つた年增女の泥沼のやうな性慾生活を中心として、その周圍に渦巻く世相の幾轉變――色慾と物慾との相交錯した人事の起伏を、作者一流の筆で描いた作だ。近來の名作。

◆**海の上**　四六判紙裝美本二九八頁　定價一圓七十錢送料六錢　**田山花袋氏著**

渺茫とした「海の上」、そこには何があるか？　波濤がある、青い燐火がある、熱帶の濃い色彩がある、港がある、南極星がある。さうして戀の芽はその海の上で、波濤の上で、次第に育くまれてゆく。

◆**かの女**　四六判紙裝美本二三六頁　定價一圓五十錢送料六錢　**田山花袋氏著**

第二の「蒲團」とも言ふべき作で、創作家とその女弟子との關係を扱つたものである。凡てが複雜で色彩に富んでゐて男女の歡樂にも苦惱にも深く深く觸れて行つてゐる。

◆**癈驛**　四六判上裝廣川松五郎氏裝　定價未定　近刊　**田山花袋氏著**

ひつそりとした山の中の癈驛――そこにも曾ては人生があつた。甘い痺れるやうな歡樂も燒きつくやうな妬情も、秘密も、疑惑も、慘劇も――凡てはあつた。さうして凡ては流れて行つた。

◆歷史小說**伊豆の賴朝**　三六判上裝美本七四〇頁　價三圓八十錢送料十二錢　**小杉天外氏著**

流寓の日の賴朝を絢爛なる著者が彩筆を以て描いた稀有の歷史小說。蛭ヶ小島の雨の晨、伊豆山權現の月の夕、――この一代の英傑兒が胸にも果して秘められた戀と悲哀はなかつたであらうか？

II　短篇選集

◆**小春傘**　菊半截判上裝四三八頁　價二圓五十錢送料十二錢　**田山花袋氏著**

「蒲團」「別れてから」「別るゝまで」「庖丁」「一兵卒」以下凡て十三篇、何れも歷史的の名篇であるわが現代文學を味はんが爲には是非とも是等自然主義の代表作を一讀して置く必要がある。

◆**惡夢**　四六判紙裝美本三二二頁　定價一圓八十錢送料六錢　**正宗白鳥氏著**

「惡夢」「たはむれ」「尾花の蔭」「昨日今日」「牢獄」等作者近時の收穫凡て十一篇。落着いた觀照と圓熟した筆致とは容易に他の追隨を許さぬは勿論、泰西の名篇に比して些の遜色を見ない。

◆**つゆ草**　四六判紙裝美本三七二頁　定價金二圓送料六錢　**三宅やす子氏著**

新進女流作家中の明星たる著者が自選傑作集。「ある科學者の妻」「秋」「髮」「忘れ得ぬ人」「形見」ほか八篇。何れも精純無比の作である。女性はやはり女性でなくては描けない。

◆**その夜の追憶**　四六判紙裝美本三三〇頁　定價一圓八十錢送料六錢　**藤森成吉氏著**

詩に充ち哀愁に充ちた行文のうちに、人間性の暗黑と社會制度の缺陷に對する憤慨を籠めた好篇の短篇――「罪業」「灯」「仔鳥の死」「故鄕を去るまで」「海」「その夜の追憶」等九篇を收む。

エト3E-22

◆誘惑

四六判紙裝鍋井克之氏裝
價一圓八十錢送料六錢

加能作次郎氏著

爛れたやうな情慾の世界を描く時、この作者は無類の鮮かさを見せる。本書には特にその方面の代表作のみを蒐めた。「唇」「廓を出た頃」「悲戯」「餘燼」「屍を嘗めた話」等十篇。

◆空しい春

四六判紙裝鍋井克之氏裝
價一圓七十錢送料六錢

宇野浩二氏著

充されざる春の惱みを描いた「空しい春」、靡爛頽廢を極めた娼婦生活の實相を寫した「遊女」、表現派的技巧に作者の新生面を開いた「鴉」、その他、「八木彌次郎の死」「夫の遁走」等凡て五篇。

III 戯曲集

◆久米正雄戯曲全集

第一卷金三圓・第二卷二圓七十錢送料十二錢

久米正雄氏著

第一卷內容——牧場の兄弟。諫言。蝕める果實。飜弄。三浦製絲場主。蜜月旅行。夏の日の戀。
第二卷內容——金井博士父子。地藏敎由來。心中後日譚。梨の花。阿武隈心中。別筵。秋立つ日。

◆薔薇と眞珠

著者裝幀西田正秋氏挿畫
價一圓八十錢送料十二錢

佐藤春夫氏著

大人のための童話的戯曲。世にもあやしい薔薇と眞珠の幻想曲で、實にまたこよなく華麗な影繪芝居の意匠畫だ。未だ世に知られざる快活な人としての著者の一面が出てゐる點で無比の作だ。

終